

アルケイアー記録・情報・歴史  
第九号 二〇一五年三月 一〇九―一三七頁  
南山アーカイブズ

モンテイニの生涯と南山大学所蔵関連資料

―オリエンタリスト、フランス語教育、

絵葉書、クリスマスカード

中尾世治・坂下凌哉

南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻

The life of Joseph Cardon de Montigny and his collection at Nanzan University:  
Orientalist, French Language Education, Postcards and Christmas cards.

Graduate Program in Anthropology, Graduate School of Humanities,  
Nanzan University

NAKAO Seiji, SAKASHITA Ryoya

*Archeia: Documents, Information and History*  
No.9 March, 2015 pp.109-137  
Nanzan Archives

はじめに

一 モンティニーの生涯

二 暫定的な分類と南山大学所蔵モンティニー関連史料の概要

(一) 文字史料

(二) 葉書

(三) 写真

(1) アルバム

(2) インドシナ

(3) 日本

(4) モンティニーの日本人配偶者

(5) ポートレート

(6) その他

(四) クリスマスカード

三 モンティニーと所蔵資料の位置づけ

(一) オリエンタリストとフランス語教師

(二) 葉書とクリスマスカード

結論

## モンテイニ―の生涯と南山大学所蔵関連資料

―オリエンタリスト、フランス語教育、絵葉書、クリスマスカード

中尾世治・坂下凌哉

はじめに

本稿は、南山大学史料室（現 南山アーカイブズ）に所蔵されている、南山大学の元教員であったモンテイニ―の資料と彼の生涯についての報告を目的としている。まず、第一章では彼の生涯をまとめ、第二章で所蔵資料の暫定的な分類をおこなない、資料を概観する。第三章ではモンテイニ―と所蔵資料の位置づけについて述べる。

なお、二―（二）から二―（四）は坂下が担当し、それ以外は中尾が担当した。

## 一 モンティニーの生涯

モンティニーは京都帝国大学においてフランス語の講師として働いていた。そのため、彼については、京都帝国大学文学部仏文科の教員であった太宰施門と伊吹武彦による回想で触れられている。また、南山大学が所蔵していた資料には、履歴書が残されている。主としてこれらを用いながら、モンティニーの生涯を以下にまとめていく。

ジョゼフ・カルドン・ド・モンティニー (Joseph Marie Bernard Etienne Cardon de Montigny) は一八八〇年、ランス北部、現在のユール県ベルネ区サンレジェ城 (Saint-Léger, Commune de Bernay, Département d. Eure) に生まれている<sup>(1)</sup>。太宰、伊吹の回想はともに、モンティニーが貴族の出身であることに言及している。「北仏ノルマンジー地方に広大な領地をもっていた大貴族の末裔」であり、フランス革命の際に一族の者が国外追放、あるいは処刑された<sup>(2)</sup>と伊吹は本人から聞いている。また、太宰によれば、「大革命の恐怖政治時代に、近親九人までギヨティーンの処刑を受けたという家柄」であったとされる。一九〇三年のフランスの紋章学の文献には、サンレジェ城のカルドン・ド・モンティニーの一族についての項目がある。これによれば、ナポレオンによるフランス第一帝政期の一八一一年八月二日に男爵 (baron) の称号を与えられ、一八一五年二月三日に文書で承認された<sup>(3)</sup>とあり、革命後に名誉回復したものと考えられる。所蔵されている一部の文書には敬称として「男爵」が付されているものもあった。

一八九九年、パリ市内の「スタニスラス中学」を卒業し<sup>(4)</sup>、「大学文学・哲学科入学資格試験」に合格している<sup>(5)</sup>。一九〇〇年に東洋現代語専門学校 (l'Ecole spéciale des langues orientales vivantes) に入学し<sup>(6)</sup>、同年インドを旅行している<sup>(8)</sup>。一九〇三年、修了試験に合格しヒンディー語の修了証を取得<sup>(9)</sup>、一九〇三年から一九一一年まで八年間、パリ市内のユニオン・火災保険株式会社 (L. Union. Compagnie Anonyme d. Assurances contre l. Incendie) の会計係とし

て勤務した<sup>10)</sup>。

履歴書(3)では、一九一二年から一九一五年までのあいだに極東、南北アメリカを旅行したと記述されている<sup>11)</sup>。なお、当初はインドと極東の旅行を計画していたようである。ユニオン・火災保険株式会社から、自社のサイゴン(現ホーチミン)、ハイフォン(北ベトナムの港湾都市)、上海、横浜、神戸の支店長、他社のボンベイとカルカッタの支店長に宛てて、旅行の便宜を図るように要請した紹介状が残っている<sup>12)</sup>。この旅行の時に、モンティニーは初めて来日した<sup>13)</sup>。一方、履歴書(2)によれば、一九一一年から一九一六年まで神戸市で「ラザラホンベール商会」に書記として勤務したとされる<sup>14)</sup>。神戸に一定期間居住していたことは確かなようであり、「神戸フランス人会(Colonie Francaise de Kobe)」のメンバーから日本を離れたモンティニーの健康を気遣う手紙が一九二〇年に送られている<sup>15)</sup>。以上をまとめると、一九一一年末に保険会社を辞め、一九一二年にインド、極東を旅するなかで、日本を廻り神戸で就職の口をみつけ、四年ほど働き、この間にも南北アメリカを旅行していたということになる。いずれにしても、一九一六年に神戸を去り、サイゴンに向かった。

履歴書(2)によれば、一九一六年から一九二〇年までの四年間、サイゴンの「ソシエテ・コマシヤル、ブラーセスターラドシン商会」に会計係として勤務し、一九二〇年から一九二八年まで「私用」で「コーチシナ」に在住していたと記述されている<sup>16)</sup>。所蔵資料には、一九一九年の神戸の旅行会社による天竜川旅行の見積書があり、日本には継続して関心を持っていたものと考えられる。一九二四年の「会社清算」の文書によれば、モンティニーを含むフランス人三名とベトナム人のプランター一名によって、一九二二年二月六日からコメの商業開発を目的として、「LAKOME」という会社を設立したが、一九二四年八月五日に廃業している<sup>18)</sup>。一九二四年時点でカプ・サン・ジャック(現ブントウ)に居住していたこともこの文書によって確かめられる<sup>19)</sup>。なお、一九二二年と一九二三年に

はサイゴンの住所宛の絵葉書が届いており、一九二三年末から一九二四年初頭のあいだにカプ・サン・ジャックに移り住んだものと推測される。<sup>(20)</sup>

この頃、日本人女性とサイゴンで一九二八年五月一二日に結婚の契約を交わし、一九二八年六月一六日にカプ・サン・ジャックで挙式している。<sup>(21)</sup> なお、太宰と伊吹の回想にもモンティニーに日本人配偶者がいたことが書かれているが、彼女の詳細は不明である。この結婚について書かれている文書によれば、ザディン州 (Province de Giadinh、現ベトナム) のディアン村 (Dian) のゴムのプランテーションを保有し、カプ・サン・ジャックの土地と建物の一部を購入している。<sup>(22)</sup> なお、所蔵資料にはこのディアン村の土地区分の地図が含まれている。<sup>(23)</sup>

一九二九年九月一〇日付のアレテ (行政命令) によって、モンティニーはカプ・サン・ジャックの州評議会 (Conseil de Province) の構成員に任命された。<sup>(24)</sup> 二年ごとに更新され、一九三三―三四年) の仏領インドシナの人物名鑑には、カプ・サン・ジャックの評議員 (Conseiller de Province) としてモンティニーの名前が記載されている。<sup>(25)</sup> なお、この評議員について、履歴書 (1) では「地方参事官」、履歴書 (2) では「県会議員」と訳されている。<sup>(27)</sup> 仏領インドシナの官報には *Conseiller de Province* という地位そのものの記載がないことから、植民地行政官ではなく植民地の民間評議員であったものと考えられる。なお、一九二九年六月、もしくは七月ごろから一定期間、モンティニーはサイゴンで暮らしている。<sup>(29)</sup> 一九三一年一月二〇日付の妻からの手紙では、サイゴンにモンティニーが出かけていたことが記されており、カプ・サン・ジャックに屋敷を持っていたものの、しばしばサイゴンに出かけていたようである。<sup>(30)</sup>

一九三三年一〇月二三日付のアレテによってさらに二年間評議員の期間が延長されたことが決定されたが、このことを伝える手紙の宛先は神戸となっており、モンティニーはすでに日本に移住していた。<sup>(31)</sup> この時期についてのモ

ンティニーの足取りはあやふやなものとなっている。神戸では「初級から文法上級まで、学生から欧州留学帰りの者にまで」外国語を教えていた。<sup>(32)</sup>その後、モンティニーは神戸から京都に居を移す。

京都に移ったモンティニーは、一九三五年、伊吹武彦の自宅を訪問した。<sup>(33)</sup>この当時、伊吹は京都帝国大学文学部仏文科の非常勤講師であった。<sup>(34)</sup>何の紹介もなく突然現れ、「フランス・ジョッケークラブ名誉会員・カルドン・ド・モンチニー」という名刺を出し、身の上を簡単に説明した後「フランス語の自宅教授をしようと思う。新聞に三行広告を出したいので、どうかその文案をつくってほしい」と伊吹に要請した。「数日後その広告がでると、さっそく数名の弟子ができ、氏は大満足のように見受けられた」と伊吹は回想している。

註(13)に記したTanakaによる文章では、モンティニーは田中飛鳥町の百万遍寺の近くに住んでおり、自宅で二〇名の生徒たちにフランス語と英語の私塾を開いていたとされる。<sup>(35)</sup>初級クラスは非常に簡単なもので日本語だけでおこなわれ、歴史について教え、「象牙や象の足、シヤムの仏像など」のモンティニーが両親から受け継いだものや彼のコレクションを見せていたという。

履歴書(1)では、一九三五年から京都の関西日仏学館でフランス語講師に就任していたとされる。しかし、Tanakaの文章には関西日仏学館には触れられていない。さらに、Tanakaはモンティニーが京都に来てから三年がすでに経ったとしている。以上のことをまとめると、一九三三年から一九三五年までモンティニーは神戸に居住し、一九三五年に京都に移り、一九三八年ごろまで自宅で私塾を開いていたと思われる。

現在入手できている関西日仏学館の資料では、一九三七年の『関西日佛學館新館』<sup>(36)</sup>と一九三八年の活動報告<sup>(37)</sup>の授一覽にモンティニーの名前が確認できた。なお、この一覽には、極東の考古学・人類学の研究のために来日していたルロワ・グーランの名前もある。彼もまた、関西日仏学館で先史学や文化史の講義をおこなっていた。履歴書

(1) では、モンティニーは一九五〇年まで関西日仏学館でフランス語を教え、一九三七年一〇月から一九五〇年三月まで、京都帝国大学文学部仏文科の非常勤講師として勤務していた。<sup>(38)</sup>

伊吹は、「戦後、モンティニーは日本人の奥さんを失った。それからというものの、氏の後姿に弧影悄然たるものが感じられるようになった。間もなく氏が京大を辞したのは、夫人との生活の場であった京都の町が、急に住みづらくなつたからではあるまいか」と推察している。<sup>(39)</sup> 日本人配偶者が亡くなつた時期は、「戦後」としか分かつていない。没後の新聞記事によれば、少なくとも一九四八年には、モンティニーはすでに妻に先立たれ、この年に住み込みの家事手伝いとして滝本春子を雇っている。<sup>(40)</sup> この記事では、南山大学の初代学長であるパッへの要請によつて、南山大学のフランス語講師として名古屋に転居したとされる。自宅は南山教会の近くの瑞穂区上山町にあつた。<sup>(41)</sup> しかし、着任の二年後、一九五二年一月二六日にモンティニーは名古屋で亡くなる。京都で世話になつた滝本春子に全遺産を譲るといふ遺書を残しており、膨大な遺産が贈られた。死後、このことが新聞で報道されている。<sup>(42)</sup>

## 二 暫定的な分類と南山大学所蔵モンティニー関連史料の概要

第一章でまとめたように、モンティニーはその生涯を南山大学の教員として閉じた。詳しい経緯は伝えられていないが、彼の遺した文書、葉書、写真、クリスマスカードが南山大学史料室に保管されている。

暫定的な分類として、我々は、文字史料としての文書、葉書、写真、クリスマスカードを区分し、整理をおこなつた。なお、一部の葉書、クリスマスカードには書き込みがなされていたが、葉書、クリスマスカードそれぞれの媒体としての重要性やコレクションの一貫性を考慮し、文字史料には組み入れず、それぞれのカテゴリーの下の位分

類とした。

表1 文字史料の分類と史料の点数

史料分類	点数
A(基礎史料)	16
B(パリ時代1899-1911年)	7
C(神戸時代1911-16年)	3
D(仏印時代1916-32年)	14
E(京都・名古屋時代1933-52年)	11
F(その他)	7
合計	58

## (一) 葉書

葉書は、書き込みがあるものを使用済み葉書、書き込みがないものを未使用葉書として分類した。総数は三二八点であった(表2)。

使用済み葉書は一二九点あり、これらのうち、葉書に記載されている日付から年代が判別できるものが一〇四点、

## (一) 文字史料

文字史料の大半は私信となっているが、履歴書、パスポートなども含まれている。一章での記述から明らかなように、モンティニーの生涯は既存の文献からは再構成することができない。そこで、モンティニーの生涯全体についての情報を含むような、履歴書、パスポートなどは「史料A(基礎史料)」としてまとめ、その他の文書は年代ごとに分類した(表1)。

すでに述べたように、内容は基本的には私信であるが、「史料B(パリ時代)」のものでは旅行の紹介状、「史料D(仏印時代)」には土地の貸借、会社の運営に関する文書がわずかに残されている。「史料F(その他)」に分類したものは雑誌の断片的な切り抜き、楽譜などといったものであるが、第一章で言及したディアン村の地図が二点ある。

判別ができないものが二五点あった。

年代が判別できる葉書の内容は以下の通りである。

一九〇〇年代(三四点)～一九一〇年代(四点)は葉書の写真、絵の内容から全てヨーロッパのものとは推定できる。一九二〇年代(二七点)に関しては、この時期より、モンテニロー宛ての住所にカプ・サン・ジャックが見られるようになり、ヨーロッパ以外の絵葉書(写真葉書)が登場する(日本、インドシナ、インドなど)。さらにこの年代の中に、確認できる限りでは、クリスマス、新年の挨拶が二点存在する。一九三〇年代(三四点)になると、この時期より、モンテニロー宛ての住所が京都のものが現われる。また、一九四〇年代(一点)のものも、住所は京都であった。具体的な年代は書かれていなかったが、住所から神戸に居住していたと思われる一九一〇～一九一六年のものを神戸時代(四点)として分類した。

さきに述べたように、書き込みはあるが、日付等、使用された年代を判断する記載がない葉書を年代判別不可として分類した。また、その中でも葉書に記載されたシリーズ名ごとで分類可能なものについては、それぞれのシリーズ名で分類し、そうでないものは写真・絵の内容からインドシナとヨーロッパに分け、その他に分類した。

一九九点の史料済み葉書に対して、未使用葉書は一九九点にのぼっている。未使用葉書は、写真・絵の内容からインドシナ、日本、その他として分類をおこなった。

インドシナの葉書(一〇〇点)も、使用済み葉書のインドシナ葉書と同様に、葉書に記載されたシリーズ名での分類をおこなった。日本の葉書(七一点)については、さらに葉書の写真や絵の内容からニュース、皇族、観光、風景、記念葉書に分類した。ニュースの内容は全て、関東大震災時と思われる東京・横浜の惨状を示す写真である。また、皇族の分類は全て、皇族にまつわる絵葉書である。観光に分類したものは、観光地・名勝地を示す写真であ

り、そこからさらにそれぞれの地名で分類した。その他（二八点）については、葉書の内容（写真・絵・印刷文字）から、それぞれがヨーロッパやアジアのものであることは推測できるが、個別具体的に分類することが困難であったため、すべてその他に分類した。

### （二）写真

次に、モンティニーが所有していた写真の分類について述べる。写真の総数は六八六点である（表3）。写真は大きく分けてアルバムにあるものとそうでないものがあった。アルバムについては、資料としてのアルバムの一貫性を考慮し、アルバムの写真は下位の分類項目を設定せず、そのアルバムの中に何点写真が存在するかという分類にとどめた。また、そうでない写真は、その内容からインドシナ、もしくは日本で撮影されたものと分類することができ、さらにその分類の中からそれぞれ分類した。

#### （一）アルバム

アルバムは六冊あり、アルバムに綴られている写真の総数は三一一点である。アルバム①（全一三点）は、全てヨーロッパの風景と思われる写真である。モンティニーが写っているものはない。アルバム②（九八点）は全て日本で撮影されたと思われる写真である。モンティニーが写っているものも何点があるが、多くはモンティニーの日本人配偶者が被写体となっている。また、写真のサイズはまちまちであり、統一されていない。アルバム③（50点）は全てヨーロッパで撮影されたと思われる。モンティニーが写っているものはない。アルバム④（五〇点）では船の航海の様子や、アジア系の子ども、またアジアの風景と思われる写真も確認できる。モンティニーが写っている

表2 葉書<sup>(43)</sup>

葉書	使用済み	年代判別可	1900s	34	
			1910s	4	
			1920s	27	
			1930s	34	
			1940s	1	
			神戸時代	4	
		年代判別可合計			104
		年代判別不可	Collection V. Fauvel, Haiphong	5	
			Edition Photo NADAL Saïgon(RUINES D'ANGKOR)	1	
			EDITION LA PAGODE SAIGON	2	
			その他(インドシナ)	5	
			その他(ヨーロッパ)	12	
		年代判別不可合計			25
		使用済み合計			129
	未使用	インドシナ	Edition Albert Porail	7	
			L. Crespin, Saïgon	8	
			Anciens Etablissement Gillot	5	
			Comité Cambodgien de la Société des Amis d'Angkor	4	
			EDITION LA PAGODE SAIGON	4	
			Collection Poujade Ladevéze	1	
			René Tétart, rue Paul-Bert, Hanoi	1	
			Edition Photo NADAL Saïgon(RUINES D'ANGKOR)	68	
			Edition Photo NADAL Saïgon(その他)	2	
			インドシナ合計		
		日本	ニュース	12	
			皇族	11	
			観光	富士山	6
				妙見山	9
				洛北金福寺	9
				丹後	2
				伊勢	1
				長良川	1
養老				1	
観光合計			29		
風景			楠公夫人遺跡	3	
			沼津	2	
			松江市	1	
	フランコ・イタリアン	3			
	その他(建築物)	2			
風景合計			11		
記念葉書	8				
日本合計			71		
その他	28				
未使用合計			199		
★ 葉書合計			328		

ものはない。アルバム⑤（五〇点）ではタージマハル等の建造物が被写体となつてゐることから、このアルバムに綴られている写真の撮影場所はインドであると考えられる。アルバム⑥（五〇点）はアルバム⑤と同様、被写体となつてゐる寺院によればインドで撮影されたものと考えられる。

（2）インドシナ

インドシナの写真は一一九点ある。これらを軍関連、風景、人物にわけて分類した。

兵士や戦場の様子が写されているものを軍関連（一三点）としてした。戦争中の写真は全九枚で、それらのサイズは縦五・二×横五・七センチメートルと他の写真と比較して小さい。その他四枚は斬首刑が執行されている状況の写真である。

被写体の中心が人物以外に置かれてゐると考えられるものを風景（五三点）として分類した。<sup>(4)</sup>さらに、それぞれの写真の内容から被写体の中心と考えられるもので分類をおこない、家屋などの建造物が中心となつてゐるものを建造物、そしてカンボジアのアンコール遺跡を撮影したものをアンコール遺跡、被写体として自動車が採用されているものを車、それ以外のものをその他として分類した。

被写体の中心が人物（四三点）のものを人物として分類した。まず、人物がヨーロッパ人<sup>(45)</sup>とアジア人のみで分類した。さらにヨーロッパ人の分類は、撮影された場所に注目し、アンコール遺跡で撮影されたものをアンコール遺跡、それ以外をその他と分類した。また、その中でも被写体にモンティニーが含まれるものに関してはその枚数を括弧内に入れてカウントした。アジア人のみとしたものは、ヨーロッパ人が被写体となつておらず、現地の人々がその中心と考えられるものである。さらに、それらとは別に、馬車や車、象といった乗り物が被写体として採用さ

表3 写真

写真	アルバム	アルバム①		13		
		アルバム②		98		
		アルバム③		50		
		アルバム④		50		
		アルバム⑤		50		
		アルバム⑥		50		
			アルバム合計		311	
	インドシナ	軍関連	戦争中の写真		9	
			斬首刑の様子		4	
				インドシナ軍関連合計	13	
		風景	建築物		12	
			アンコール遺跡		12	
			車		4	
			その他風景等		25	
				インドシナ(風景)合計	53	
		人物	ヨーロッパ人	アンコール(内モンティニー氏が写っているもの)		6(5)
				その他(内モンティニー氏が写っているもの)		18(4)
					ヨーロッパ人合計	24
			アジア人(のみ)		5	
			乗り物	馬車		2
				車	遺跡(内モンティニー氏が写っているもの)	
	その他(内モンティニー氏が写っているもの)					6(1)
					車合計	11
			象(内モンティニー氏が写っているもの)		1(1)	
			乗り物合計(内モンティニー氏が写っているもの)		14(7)	
			人物合計		43	
	航空写真	カブ・サン・ジャック		10		
			インドシナ合計		119	
	日本	裏面に記述あり	人物		23	
			風景		2	
				裏面に記述あり合計	25	
裏面に記述なし		人物(内モンティニー氏が写っているもの)		34(3)		
		風景		21		
		裏面に記述なし合計	55			
		日本時代合計		80		
モンティニーの日本人配偶者	日本(内モンティニー氏が写っているもの)		24(2)			
	海外(内モンティニー氏が写っているもの)		112(6)			
		モンティニーの日本人配偶者合計		136		
ポートレート	ヨーロッパ		23			
	Saigon(アルバム)		12			
	日本芸能		3			
		ポートレート合計		38		
その他				2		
		★写真合計		888		

れているもの(乗る物(一四点))として分類した。この乗る物には全てヨーロッパ人が写っている。さらに、カブ・サン・ジャックと記載された大判の航空写真が一〇点確認できた。

### (3) 日本

日本で撮影された写真を日本とし、この総数は八〇点であった。また、これらの写真には裏面に書き込みがあるものが存在したため、裏面に書き込みがあるものとならないものでそれぞれ裏面に記述あり、裏面に記述なしとして分類した。

二五点の裏面の記述は全て日本語で書かれており、その内容はモンティニー(もしくは夫人)に宛てられ



表3 クリスマスカード

クリスマスカード	年代なし	34	
	年代あり	カーブサンジャック	5
		京都	23
		名古屋	3
	年代あり合計	31	
★クリスマスカード合計		65	

## (四) クリスマスカード

クリスマスカードは総数六五点であった(表3)。クリスマスカードは、年代が表記されていないものも含まれていたため、年代なし、年代ありにそれぞれ分類をおこなった。

年代の表記はないものの、一部、記載されているモンティニー宅の住所から年代が推定できそうなものもあるが、年代が表記されていないものは全て年代なしとし、三四点を数えた。

年代が判別できるものは年代ありとし、三一点であった。モンティニーの居住地に合わせ、インドシナ時代(一九一六～一九三二年…五点)、京都時代(一九三三～一九五〇年…三三点)、名古屋時代(一九五〇～五二年…三三点)と分類した。

## 三 モンティニーと所蔵資料の位置づけ

最後に、モンティニーと南山大学所蔵のモンティニー関連資料の位置づけについて述べておきたい。

## (一) オリエンタリストとフランス語教師

第一章でみたように、モンティニーは東洋現代語専門学校でヒンディー語を学び、在学中と就職後にアジアに旅行にでて、その後、神戸で職を得ている。彼は早い時期からアジアに関心を寄せたオリエンタリストであったといえよう。オリエントの過ぎ去った歴史やエキゾチズムへの憧憬といったオリエンタリズムの基本的な性質をモンテ



図1 アンコール遺跡（「写真、インドシナ、風景、アンコール遺跡」）

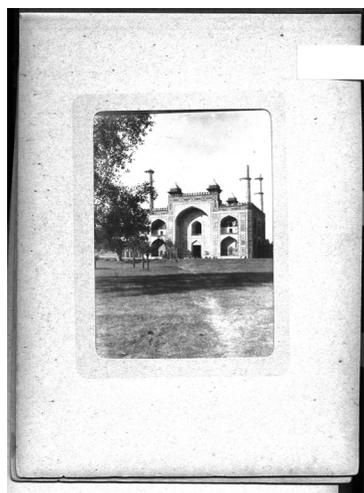


図2 インド史跡（「写真、アルバム⑤」）

イニーも共有していたものと考えられる。実際のところ、所蔵資料にも東南アジア、インドの史跡の写真が数多く含まれている（図1、2）。一部に、インドの市場といった同時代の様子が写されているものがあるが（図3）、在地の近代化を捉えた写真は乏しい。また、いかにもエキゾチズムを喚起させる民族衣装をまとった人物の写真がある一方で（図4）、当時の村落や都市の風俗を写し撮るような写真はわずかしかない。こうした写真の傾向はオリエンタリストとしてのモンティニーの関心を如実に反映している。

他方で、フランス語教師としての、あるいは日本のフランス語（フランス文学）教育へのモンティニーの貢献を見逃すことはできない。モンティニー自身はアグレジェ（教授資格所有者）ではなく、翻訳も著作も残さず、めだ

って言及されることはないが、地味ながら継続的な貢献を果たしていた。いくつか文脈を補いながら、このことを示しておきたい。

第一章でみたように、モンティニーは、

一九三三年ごろには、神戸に移住し、外国語教育を（おそらく自宅で）おこなっていた。遅くとも一九三七年には  
関西日仏学館でフランス語の講師となっている。

関西日仏学館は一九二七年にフランス語教育、文化振興を主たる目的として、駐日フランス大使のクロードルの  
発案によって設立された。クロードルは一九二一年から一九二七年まで日本に滞在していたが、着任後<sup>(48)</sup>すぐに日本  
におけるフランス語教育の普及の必要性を感じていたようである。たとえば、クロードルは、一九二二年の京都帝  
国大学での講演においてフランス語を学ぶことの意義とフランス語教育の普及について語っている<sup>(49)</sup>。この当時、京  
都帝国大学にはフランス文学の講座が開設されていなかった。フランス留学から帰国した太宰施門が一九二三年四  
月からフランス文学の科目を担当し、講座が設置されたのは一九二五年五月のことである<sup>(50)</sup>。つまり、一九二〇年代  
初頭には京都ではフランス語教育の制度がほとんど整っておらず、モンテニが京都にやってきた時期は、よう



図3 インドの市場（「写真、アルバム⑤」）



図4 民族衣装を来た男性（「写真、インドシナ、人物、アジア人（のみ）」）

やくフランス語教育の制度の確立がなされた頃に重なっている。

『京都大学文学部50年史』の付録によれば、モンティニーは一九三七年一〇月から一九五〇年三月まで、京都帝国大学文学部仏文科の非常勤講師として、「仏蘭西文學」の授業を担当していたとされる。<sup>51</sup> わずかな記載ではあるが、一二年という比較的長期にわたって、かつ太平洋戦争をまたいで教育をおこなっていたという点は強調されるべきであろう。というのも、新制大学として発足した一九四九年の京都大学の文学部には外国人教員はわずか六名しかおらず、モンティニーはそのうちの一人であったからである。<sup>52</sup> さらに、この六名のなかで戦前に京都帝国大学の教壇にのぼった者は、モンティニーを除けば、一九三二年に一度だけドイツ語学・ドイツ文学を教えた三浦アンナ<sup>53</sup>だけである。<sup>54</sup> 京都帝国大学文学部仏文科の初期の教員であった太宰施門と伊吹武彦が回想でモンティニーに言及しているのは、貴族出身という彼の家柄の珍しさだけではなく、戦争中も日本に残り、長くフランス語教育にあたっていたことに拠るのではないかと思われる。

また、モンティニーはフランス文学の翻訳の手助けもおこなっていた。一九四一年に出版された岩波文庫の『家なき娘(上)』の訳者のあとがきはこう書かれている。「カルドン・ドウ・モンチニー氏は、いつもながらの変わらぬ友情をもって、微力な訳者の疑問を懇切に解いて下さった。特に記して感謝の微意を表したい。<sup>55</sup> 訳者である津田稜の他の訳書や岩波文庫のフランス文学の訳書をあつたが、このような訳書の謝辞でモンティニーの名前が直接言及されているのは、『家なき娘(上)』だけであった。しかし、実際には、フランス文学の翻訳への多少の貢献はあったものと思われる。たとえば、伊吹の回想では、「ド・モンチニー氏は以前京大の講師をつとめ、私の翻訳とかかわりがあった。ノルマンディを舞台にしてその風俗を多分に取り入れたフローベールの小説『ボヴァリー夫人』を翻訳していた頃、この写実主義の大家の微に入り細に穿った服装、例えば祭りに着て踊る綺麗なチョッキ

の描写が、実物を知らないからどうもよくわからない。そこでノルマンディ出身のモンチニー氏の家を訪ねて聞いて見ると……とある。<sup>(56)</sup>モンチニーはチョッキの実物やDocという馬車の写真を伊吹に見せたという。この伊吹の訳による『ボヴァリー夫人』は岩波文庫のものであるが、あとがきにモンチニーへの謝辞はない。活字としては残りにくい微細な貢献は、ほかにもあつたであろうと推測される。

このようにモンチニーの生涯をみると、フランス植民地をわたり歩いたオリエンタリストとしての側面と日本に定住して以後のフランス語教師としての側面をみてとることができる。第二章の史料紹介でみたように、モンチニーの生涯を微細に検討できるほどの史料は残されてはいない。とはいえ、彼に似た境遇にあつた者たちは数多くいたはずである。

パリの保険会社を辞した後、モンチニーはフランスに帰ることはなかった。彼のような流浪の者たちにとってのフランス植民地の社会史といった研究もありえるだろう。モンチニーの生涯はその一つの事例となりえるだろう。あるいは、幕末・明治期のお雇い外国人についての研究とは異なつた、<sup>(57)</sup>それ以降の外国語教育のための外国人教師の社会史の一コマとしてモンチニーをとりあげることが可能である。他の事例を参照することで、モンチニーの特異な生涯は位置づけられるであろう。

## (二) 葉書とクリスマスカード

二で述べたように、写真はオリエンタリストとしての関心に基づいたやや典型的なものや妻や友人を被写体とした私的なものが多い。ただし、一九二〇年代後半のカプ・サン・ジャックの航空写真は、年代と場所が特定されているため、カプ・サン・ジャックの景観の歴史的な再構成には有益な資料といえる。



図5 関東大震災（「葉書、未使用、日本、ニュース」）



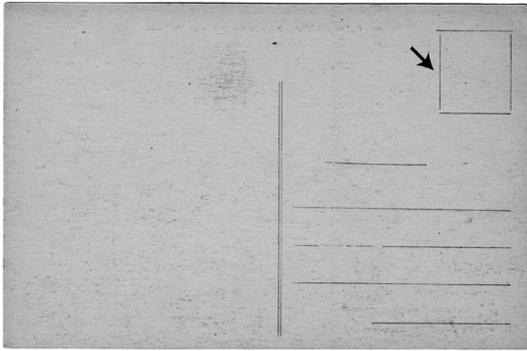
図6 名勝地（「葉書、未使用、日本、観光、長良川」）

葉書は一貫した意図によって収集されたものではなく、やや数も少ないため、このコレクション単独ではそれほど資料的価値が高いとはいえない。しかし、アーカイブズとしての葉書の性格を考慮すると、デジタル・アーカイブとして公開することで、幅広い研究分野への貢献が期待できる。

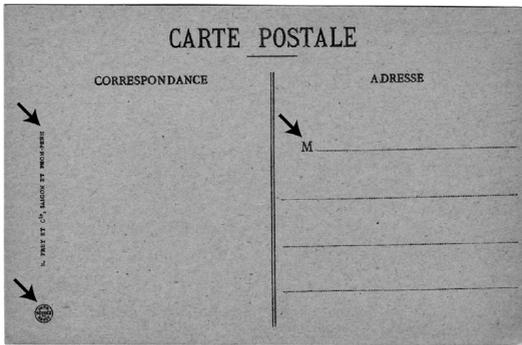
二でふれたが、南山大学所蔵のモンティニー関連資料の葉書には、三八点のヨーロッパの葉書がある。フランスでは一八八九年のパリ万国博覧会で、エッフェル塔を挿絵とした絵葉書が絶大な人気を博し、一九〇〇年のパリ万国博でフランスの絵葉書は「黄金時代」を迎え、収集の対象となっていた<sup>(58)</sup>。モンティニーは一九〇〇年にパリの東洋

現代語専門学校に入学しており、絵葉書とその収集への熱気を共有した世代であったといえよう。

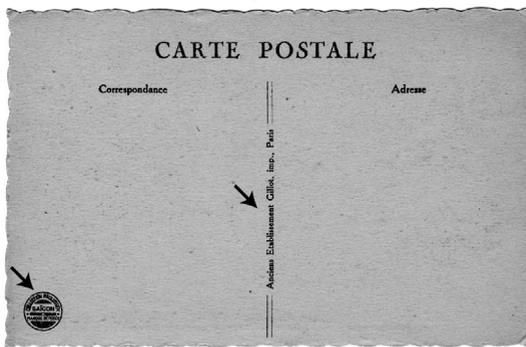
日本における絵葉書のブームもほぼ時を同じくしている。一九〇四年の日露戦争の勃発によって、大陸への通信手段として絵葉書の需要が急激に増大し、ナシヨナリズムの高揚を目的とした戦役記念の絵葉書が一大ブームとなり、東京市内に絵葉書販売店が乱立し、全国に絵葉書収集クラブが



L. Crespin, Saïgon



EDITION LA PAGODE SAIGON



Anciens Etablissement Gillot

図7 インドネシアの葉書（「葉書、未使用、インドシナ」）

生まれた<sup>(59)</sup>。戦前の絵葉書についての先行研究では、絵葉書は、その高度な印刷技術と速報性から、新聞や雑誌と同等のメディアであったという指摘がなされている。たとえば、一九二三年の関東大震災では罹災状況を記録する絵葉書が発行され、災害状況が全国にもたらされたという<sup>(60)</sup>。なお、所蔵資料においても、関東大震災によって罹災した東京や横浜の惨状を写した絵葉書がある（図5）。モンテイニー関連資料の日本の葉書では、名勝を写したものが多く（図6）、日本でも絵葉書収集をささやかな趣味としていたものと思われる。

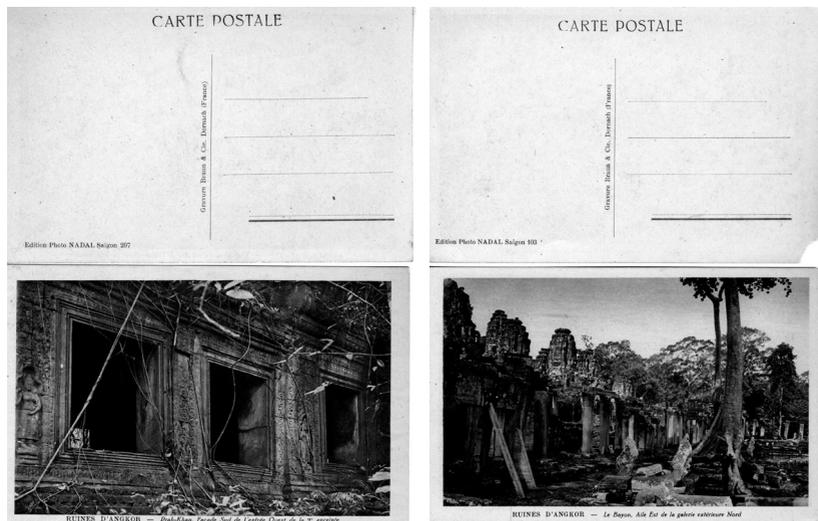


図8 シリーズ化された葉書（「葉書、未使用、インドシナ」）

絵葉書の資料としての最大の特徴は、住所・宛名欄の印刷様式、葉書に貼付された切手・消印などから作成年代／使用年代の大きな特定が可能であり、かつ、一定数の絵葉書が参照できる場合、絵葉書の写真に写された景観・被写体の変遷をたどることが可能になる、ということである<sup>6)</sup>。言い換えれば、絵葉書は、作成年代と被写体の場所が特定しやすく、そのために、他の絵葉書との相互比較が容易になっている。この絵葉書の特徴によって、アーカイブズとしての絵葉書は、少量ではあまり資料的価値をもたないが、他のアーカイブズと参照可能になることによって、資料的な価値を大きく持つようになる、という特徴を有するようになっていく。

モンティニー関連資料の葉書は必ずしもすべてが絵葉書ではなく、数量からしても、このコレクション単独ではあまり資料的価値が高いとはいえない。しかし、これがデジタル・アーカイブとして公開され、他のアーカイブズと比較可能になったとき、この資料は調査・研究に役立つものとなるであろう。

ーズをすべて網羅することはできないが、公開し共有されることで資料的価値をもつようになると考えられる。現在、日本国内では、こうした資料が公開されたアーカイブズは確認できていない<sup>62</sup>。その意味では、モンテニー関



図9 個人で製作されたクリスマスカード、(上)表紙(下)中身(「クリスマスカード、年代なし」)

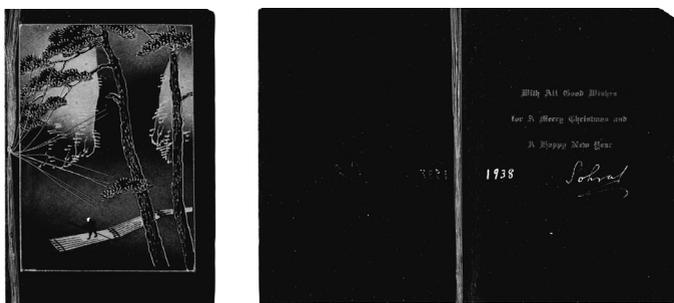


図10 印刷されたクリスマスカード、(左)表紙(右)中身(「クリスマスカード、年代あり、京都時代」)

また、モンテニー  
 関連資料で特徴的な  
 のは仏領インドシナ  
 の葉書一〇〇点である。  
 分類作業のなかで、  
 仏領インドシナの  
 絵葉書は、作成する  
 会社によって、住所・宛  
 名欄の印刷様式が異  
 なることが明らかに  
 なり(図7)、写真に番  
 号がふられシリーズ化  
 されているものを発  
 見することができた  
 (図8)。モンテニー  
 関連資料のみで会社  
 ごとのシリ

連資料の公開は独自の貢献を果たしうる。

最後に、クリスマスカードについて述べておきたい。クリスマスカードは総数六五点とやや少量ではあるが、個人で制作されたものや印刷されたものが確認された(図9、10)。残念ながら日本でのクリスマスカードの歴史研究を見つけることはできなかった。しかし、クリスマスカードの風習の伝来と伝播、デザインの模倣や流用は、信仰を実践から具体的に捉える格好の素材である。現状ではクリスマスカードははまだ資料としての意義が明確にされていないものと思われる。これらを歴史資料として位置付けて、展示・公開していくことは、問題提起となりうるであろう。

## 結論

本稿では、南山大学史料室に所蔵されていた、南山大学の元教員であったモンティニーの資料と彼の生涯についての報告をおこない、それらの位置づけについて述べた。

具体的には、まず、モンティニーが貴族出身のオリエンタリストであったことを明らかにし、オリエンタリストとしての彼の関心が所蔵資料の写真に典型的にあらわれていることを指摘した。つぎに、フランス語教師としての彼の側面について述べ、一九三〇年代の京都におけるフランス語教育制度の萌芽期に教育を開始したこと、京都帝国大学・京都大学で戦中期から戦後にかけて教育をおこなった例外的な外国人教師であること、この時期のフランス文学の翻訳に多少の貢献をおこなったことを指摘した。そのうえで、モンティニーが昭和以降の外国人語学教員の歴史研究の一事例となりうることを述べた。

資料としては、全体として、単独では研究の積極的対象にはならないことを述べたうえで、葉書はデジタル・アーカイブとして公開することで、他のアーカイブズとの比較参照が可能となり、資料的価値をもつこと、クリスマスカードはそのものが積極的な研究の対象となっておらず、展示・公開によって積極的に資料として位置付け、問題提起をおこなうことが必要とされることを指摘した。

## 註

- (1) 史料A、履歴書(1)、パスポート。
- (2) 伊吹武彦「あの時あの頃——モンチニー講師の思い出」『以文会友 京都大学文学部今昔』、二〇〇五年、京都大学学術出版会、三三一・三三二頁。初出は一九六八年。
- (3) 太宰施門「外人教師」『京都大学文学部五十年史』、一九五六年、京都大学文学部、四五二頁。
- (4) Wignolle, J. 1903. *Annuaire général héraldique pour 1903. Organe officiel, part 2. Des cours, de monde-diplomatique et de la noblesse*. Paris: s. n. p. 419
- (5) 史料A、履歴書(2)。
- (6) 史料A、履歴書(1)。
- (7) 史料A、東洋現代語専門学校入学証明証。
- (8) 史料A、履歴書(3)。「ただし、これは後年の記述であり、一九一一年のインド・極東旅行との混同の可能性がある。
- (9) 史料A、東洋現代語専門学校修了証明書。
- (10) 史料A、履歴書(2)、史料B、一九一一年二月二三日付のユニオン火災保険株式会社からの紹介状。
- (11) 史料A、履歴書(3)
- (12) 史料B、一九一一年一月二三日付のユニオン火災保険株式会社からの紹介状。
- (13) 史料A、「古都に戯れるという至上の慰め 暈の上で死すことを決意したモンチニー氏の生涯」(タイプ文、仏語)。著者年代不明。ただし、欄外にM. Tanakaという手書きの記述がある。内容から一九四〇年頃と推定される。乃木希典が自害した一九一二年に日本に来ている、という記述がある。
- (14) 史料A、履歴書(2)。
- (15) 史料C、一九二〇年七月二六日付の差出人不明、インドシナ・フランス商社(La Societe Commerciale Francaise de l'Indochina)のサイゴン店長宛の手紙。サイゴン市に居住していたモンチニー宛に転送されている。

- (16) 史料A、履歴書(2)。
- (17) 史料C、「天竜川旅行旅程表」(英語)。
- (18) 史料D、「会社清算」。なお、後年の伊吹の回想に「仏印——いまのベトナムで米の取引をしていたのだという」という一節がある。伊吹武彦「あの時あの頃——モンチニー講師の思い出」、前掲、三三二頁。
- (19) 史料D、「会社清算」。
- (20) 「葉書／使用済み／年代判別可／1920s」、一九二九年四月二五日付の絵葉書、一九三三年一月二二日付の絵葉書。
- (21) 史料D、「売買契約書類」。
- (22) 史料D、「売買契約書類」。
- (23) 史料F、「ディアン村地図」。
- (24) 史料D、一九二九年九月一日付のアレテ。
- (25) 史料D、一九三二年九月一日付のアレテ。
- (26) Lacroix-Sommié et al. (eds) 1933 *Indochine Adresses. 1ère année 1933-1934. Annuaire complet (européen et indigène) de toute l'Indochine, commerce, industrie, plantations, mines, adresses particulières*. Albert Portail: Saigon. p. 989
- (27) なお、履歴書(1)では一九三二年から任官したことに、履歴書(2)では一九二九年から任官したことになっている。
- (28) *Annuaire administratif de l'Indochine*. 1931, 1932, 1934.
- (29) 「葉書、使用済み、年代判別可、1920s」、一九二九年五月一日付の絵葉書はカプ・サン・ジャックの住所宛で届いて
- いるが、一九二九年八月八日付、同年九月七日付、同年九月一七日付の絵葉書はカプ・サン・ジャックの住所が書かれているが、サイゴンの住所に転送されている。
- (30) 「葉書／使用済み／年代判別可／1920s」、一九三一年一月二〇日付の妻の久枝からの手紙。この手紙は日本語がアルファベット表記で書かれている。モンティニーはこの時点ですでに日本語の会話はできていたと考えられる。
- (31) 史料D、一九三三年一〇月二三日付のアレテ。
- (32) 史料A、「古都に戯れるという至上の慰め 畳の上で死すことを決意したモンティニー氏の生涯」。
- (33) 伊吹武彦「あの時あの頃——モンチニー講師の思い出」、前掲。
- (34) 著者不明「伊吹武彦教授略歴並びに著作目録」「人文論究」一九(四)、一九六九年。
- (35) 史料A、「古都に戯れるという至上の慰め 畳の上で死すことを決意したモンティニー氏の生涯」。
- (36) マルシャン、ルイ、宮本正清訳、日仏文化協会、一九三七年、六九頁。
- (37) 「日仏文化協会・関西日仏学館会務報告・昭和12年度」、九頁。
- (38) 「付録」「京都大学文学部50年史」、一九五六年、京都大学文学部、三九八頁。
- (39) 伊吹武彦「あの時あの頃——モンチニー講師の思い出」、

- 前掲、三三五頁。
- (40) 『毎日新聞』夕刊一九五三年一月二日付「遺産百万円舞込む仏人から看護婦へ」。
- (41) 史料E、一九五二年、ジョックケークラブからの手紙。
- (42) 『毎日新聞』夕刊一九五三年一月二日付「遺産百万円舞込む仏人から看護婦へ」。
- (43) なお、インドシナの葉書の出版社名の表記は資料に即して記載した。
- (44) これは、基本的に人物が写っていない、写っていてもカメラ目線でなかったり、ポーズをとっていないものは、その人物ではなく風景が被写体の中心であると考えた。
- (45) ヨーロッパ人とアジア人が一緒に写っているものに関して はヨーロッパ人に分類した。
- (46) サイド、エドワード W、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、『オリエンタリズム 上、下』、一九九三年、平凡社。
- (47) なお、この時期のフランスのオリエンタリズムと考古学への関心については、藤原貞朗、『オリエンタリズムの憂鬱…植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』、めいこん、二〇〇八年に詳しい。
- (48) クローデル、ポール、奈良道子訳、『孤独な帝国 日本の1920年代ポール・クローデル外交書簡(1911-21)』、一九九九年、草思社、七頁。
- (49) クローデル、ポール、前掲、九八頁。
- (50) 京都大学百年史編集委員会、『京都大学百年史…部局史編 一』、一九九七年、京都大学、一三七頁。
- (51) 「付録」『京都大学文学部五十年史』、一九五六年、京都大学文学部、三九八頁。
- (52) 京都大学百年史編集委員会、『京都大学百年史…総説編』、一九九八年、京都大学、五三六頁。
- (53) 三浦アンナはキリスト教図像学を日本に最初に紹介した美術史研究者であり、ベルリン大学でドイツ初の女性の神学博士となった。一九二六年、三浦耀と結婚し来日。一九三二年の夫の死後、三高、同志社大学、京都帝国大学の講師をへて、一九五八年に立教大学教授となった。『日本人名大辞典』、二〇〇九年、講談社。
- (54) 京都大学百年史編集委員会、『京都大学百年史…総説編』、一九九八年、京都大学、五三六頁。
- (55) マロ、エクトール、津田稔訳、『家なき娘(上)』、一九四一年、岩波書店。
- (56) 伊吹武彦、『言葉から言葉へ』、『NANZAN UNIVERSITY BULLETIN』、一九七五年、第二九号、五頁。
- (57) たとえば、梅溪昇、『お雇い外国人の研究』、青史出版、二〇一〇年。フランス人に関しては、飯田史也、『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』、風間書房、一九九八年。
- (58) 菊地哲彦、『都市表象の政治学と反政治学——世紀転換

- 期における「パリの絵葉書」をめぐって、『年報社会学論集』  
第一八号、二〇〇五年、四二、四六頁。
- (59) 小暮修三、「甦る戦前の〈海女〉…絵葉書に写る〈眼差し〉  
の社会的変遷」、『東京海洋大学研究報告』第一〇号、  
二〇一四年、六頁。
- (60) 小暮修三、前掲、七頁。
- (61) 西向宏介、「アーカイブズとしての絵葉書」、『広島県立文  
書館紀要』第二二号、二〇一三年、六六頁。
- (62) 大西啓子、「東南アジアの写真を探す―20世紀初頭までの  
都市の写真―(レファレンスツール紹介1)」、『アジア情報  
室通報』第六卷第二号、二〇〇八年、([https://navi.ndl.go.jp/  
asia/entry/bulletin6-2.php](https://navi.ndl.go.jp/asia/entry/bulletin6-2.php)、二〇一五年一月二一日最終確認)  
参照。この短報では、東南アジアの国別に書籍や国外の公開  
されたアーカイブズをいくつか紹介している。